

「長い時間のはじまり」

作／笠木泉

登場人物

女 2
女 1
男 2
男 1

1 ハヤシ

舞台上、四人がいる。

下手側には丸いラグマットがあって、その上に小さな脚立が一つある。
その上に座る女1。

その横には男1が立っている。

舞台の上手側に女2が、立っている。

すなわち、舞台上は男1と女1の空間（下手側／ラグ）、女2の空間が
（上手側）が存在する。お互いがお互いの世界を干渉することは多くな
い。

さらに、舞台のどこかしら、三人からは距離を取った任意の場所に、こ
の舞台全体を見ている男2がいる。

女2、ひとり、誰にともなく話し始める。

女2 ここは、小さな、アパートです。二階建ての、四角い、古い、アパートです。

どの町にもよくある、似た感じの、アパートです。目に留める人はいないでしょ
う。昨日は雨が降っていたので、アパートの前は、今、ぬかるんでいます

男1 静かだな、今日は。

女1 静かね。

女2 ……わたしは、この、アパートに引っ越すことになり、引っ越し、アパ
ートで、生活を始めます。なんとなく、暗い町ですよ。足元がぬかるんでいて、道
は、グレー。……そうなんです。昔、でも、なにか、この隣の駅には、遊園地
があって、あったそうで、そこには、花がたくさん咲いていたし、今もその季節
には、にぎわうんだと聞いています。その隣の、町に、引っ越すことにしました。

もちろん、この町でなくても、隣の駅でも、どこでもよかった。町はどこにでもありますから。どこでも、よかったんです。この、アパートの横に流れているのは、川です。アパートの横に、堤防があり、そこを駆け上げれば、タッタタッタッタッタッタツツ……（堤防を駆け上がった）多摩川です！ ……わたしは、この小さなアパートの二階の201にもうすぐ、引っ越してきます。そして、（男1女1を指し）この二人は隣の、202に住んでいます。

この二人とは、男1と女1のこと。

すなわち、ラグマットの上は小さなアパート202号室の部屋である。

女1 お腹すいたね。

男1 すいたな。

女1 どうする？

男1 どうするかな。

間

女1 ねえ。どうする？

男1 ああ。

女1 なんか、食べたい。

夫1 寒い？

女1 だいじょぶ。

男1 下、もう一枚、着る？

女1 え？

男1 重ね着。

女1 なによ、もう、とっくにしてるよ。

男1 あ、そうなの。

女1 夏から、してます。

男1 変な話だね。

女1 ばかやろう。

間。

男1 ばかやろうじゃないよ……。

女1 夏も、寒い。

男1 確かに、夏は夏でな。スーパー行くと、キンキンだから、風邪引いちゃう。
よくない、体によくない。

女1 ひえひえよ。

男1 まいっちゃうよなあ。

女1 そうだ、ねえ、残った、しょうゆの、なんだっけ、名前、あれ、なかった？

男1 (何かを思い出したか) そうだ。

と、男1、自分が持っているエコバッグから、古い本(ヴァージニア・
ウルフ「燈台へ」)を取り出し、

男1 じゃーん。

女1 どうしたの？

男1 買った。

女1 本買ったの？

男1 いやー、楽しかった。

女1 どこで？

男1 歯医者近くの。

女1 ああ、歯医者の……え？ どこ？

男1 松村さんの。松村デンタル側の。

女1 あんのところまで、行ったの？

男1 まあね。

女1 へえ。こんな夜中に？

男1 散歩、散歩。

女1 一人で、よくいけたねえ。

男1 ……遅くまで、やってんだよ。ネオン、コウコウ。驚いたね。いやあ、楽しかった。なんか、本屋じゃない、いろいろあった。ギター、ぬいぐるみ、タオル、
シーディー、位牌まであったよ。安いからさあ、いろいろ買っちゃった。いらな

いけどね。買った。

女1、エコバックから出てくる様々なガラクタを見て、

女1 ……ちょっと。

男1 ん？

女1 110円キンイチに行ったの？

男1 ……違うよ。

女1 違う？ 違うってどういうこと？

男1 ほら、古本屋だよ。なんとかオフ。

女1 110円キンイチに行ったんでしょ。

男1 ちがう、ちがう、そうじゃないよ。

女1 ……じゃあ、これは。

男1 百均は、松村とは逆だろ？

女1 そうじゃなくて、これは110円キンイチかって。

男1 だから、キンイチじゃないよ。キンイツ。

女1 110円キンイチじゃないの？ じゃあ、一体いくらしたの？

女1、本をひっくり返して、

女1 ああ、値札、はがしてやがる！ (裏表紙を触り) ベタベタする！ ここが、

ベタベタする！ 黒くなった！ やだ！ 手がベタベタする！

男1 (呆れて) ……ふきなよ。

女1 コスい。

男1 コスい？ 俺が？

女1 (独りごちる) ばかやろう。

間。

女1 言い過ぎました。ごめんなさい。

男1 ……

女1 ごめんなさい。

男1 ……いや、いいよ。

女1 ツルセコなんて言ってしまったって、わたし、そんな、つもりじゃなくて。

男1 ツルセコ？

女1 ほんと、申し訳ないです。

男1 今の会話で、そんなこと言ってた？ 言っていないよ。

女1 心の中で。

男1 ……じゃあ、しょうがないけど。それ言われても。

気まずい、間。

女1 ……そうだ、あれ買ったよ。通販で。

女1、ポケットから薬の瓶を取り出した。

白い錠剤が入っている。

男1 え、また？ また電話したの？

女1 無料だから。「キミエホワイト」。

男1 なにそれ。

女1 この薬ね、息子が開発したんだって。母のためって。

男1 何に効くの？

女1 わかんないけど。

男1 それ、薬じゃないだろ。

女1 そうなの？

女1、驚いた面持ちで手の中の薬瓶を見た。

女2、再びひとりで話し出す。

(ところで、いつからか舞台上には唸り声のような音が鳴っている。その声は男2から発せられているものだが、あまりにかそけき声のため一

何の音なのかは観客にはわからないだろう。以後、戯曲上に表記される唸り声は全て男2が発するものとする。

女2 このアパートは一階、二階建てです。小さな、アパートです。四つの部屋があります。今はこの二人と、ふたり、と、あと、一階に一人、住んでいます。タクシーの運転手だと聞いています。外国の方だって。猫とか犬とか飼っているとか。どんな方なのか、まだ、知りません。

女1 (咳く) 葉じゃないんだ。

女2 六畳が、二つ。どこの部屋も、同じ間取りでしょうか。キッチン。コンロはふた口。古いものなので、替えてもらいたいなと思っています。トイレ。お風呂。昔の風呂です。わかるかなあ。がちゃん、がちゃん。……引越は、12月。もうすっかり寒くなっていました。ものすごく暑い、気が狂いそうな日々から、ある日突然、気温が下がって、ふと、みな、呼吸をして、秋を感じたことでしょう。こうやって、いきなりね、まいるね、季節って変わるんだっけ、なんて言いながら、この町の、小さな町の誰もが、そのように思ったはずです。実は、去年も、そうやって、ある日突然、気温が下がったんですよ。それを、みな、誰もが、やっぱり忘れてしまったんです。昨年のことなど、もう、すっかり忘れてしまったのです。なにかにも、忘れていきます。

女1 じゃあ、なんなのかな。

男1 そんなものは、なんでもないよ。

女1 なんでもないって、どういうこと？

男1 ラムネみたいなもんだろうな。

女1 ラムネ？ 嘘でしょ。じゃあ、ラムネ食べればいいじゃない。

男1 そうだよ。ラムネの方がいいよ。森永以外のラムネも美味しいぞ(と、口に入れ豪快に噛み砕く)。

女1 じゃあ、「しじみ」は？

男1 「しじみ」は「しじみ」でしょ。……まずい。

女1 ばかやろう。

男1 ……はい、ばかです。

女1 そんなこと言わないで。かわいそう。いい？ 自分を責めちゃだめ。

「ばかやろう」はどうやら女1の口癖のようだ。

男1、ため息でもついたか。

男1 ……なんか、食べようか。

女1 しょうゆの、なかった？

男1 つげやきせんべい？

女1 ソフトサラダ。

男1 (少し小馬鹿にしたような) ソフトサラダは塩でしょう。

女1、しょんぼり、頭をもたげてしまう。

長い間。

男1 ……どうした？

女1 ……110円キンイチ。

男1 え？

女1 行きたかった。

間。

男1 ……そうか。ごめん。／わたしは、このとき、別のことを考えていた、別のこと。／じゃあ、なんか買ってくるかな。助六？

女1、そのままうずくまってしまった。

男1 ……大丈夫？

女1 うん。頭痛い。

男1 そう。行ってくる。待てる？

女1 わたしもいく。

男1 いいよ。ありがとう。行ってくる。ゆっくり寝てて。

女1 ……お願いします。すみません。お願いします。

男1、買い物に出かける。

女1は、ひとりになった。
唸り声のような音は、いつの間にか消えていた。

2・ハシモト／カーサ・ヨクナパトーフア

女2 ……では、この部屋のことをもう少しお話しします。わたしがこの部屋に引っ越しを決めた、いちばんの理由は、……実は、この壁の色。見て！ この色！

女2は、壁に向かって手を大きく広げた。

壁の色は確かに美しい水色らしい。

黄色いジャケットを着た不動産屋が登場、これは男1。手には丸い座布団。それを舞台上手側に投げ入れ、ここに201号室が完成するだろう。

そして「カーサ・ヨクナパトーフア」と書いてある小さな看板を置いた。

そう、ここは小さなアパートだ。

女2 ……不動産屋に鍵を開けてもらって、この部屋に入った瞬間に、このような気持ち？ やったー！ という気持ちになったんですね。この人が、不動産屋さんの、

男1 ハシモトです。安いでしょ。

女2 ここ、スーパ―はありますか？

男1 ありますよ。ローソンスストア100。

女2 ローソンスストア100？

男1、満面の笑顔。

女2 ……だけですか？

男1 だけ？ だけってこともないんですけど、うーん……だめですか？

女2 いや、まあ、だめってこともないんですけど。もう少し大きいのが、あれば。

男1 自炊派？ ってことだ？ あー、なるほどなるほど。お客様、最高。

女2 え？

男1 そうですよねえ。自炊が一番！ わたし、あれです。グルテンフリーですか
ら。

男1、さらに笑顔。

女2 ……ああ、興味あります。

男1 そうですね。他にもいろいろやっていますよ。血液型ダイエットとか。ダダモ
博士って人が提唱してるんです。知ってます？ わたし、A型なんですけどね、
生粋の。親もエーエーで。で、A型はもともと農耕民族だから、まあ、こっから
ものすごく端折っちゃいますけど、米食べないとだめなんですって。米食べダイ
エット。どうなのそれってねえ。

女2 でも、わたしはもう、この水色の壁にすっかり心奪われていて、

男1 お客様、何型ですか？

女2 A型です。／このあたりの、彼、不動産屋の話はあまり聞いていません。

男1 へえ。やっぱり！ A型だと思いました！ で、それですね、他はね、駅
から少し、歩きます、歩けばね、西のほう、隣の駅のほうになっちゃいますけど、
ダイエーとか、サミットとか、いろいろ、ありますよ。ね。ほら、ここから見え
るでしょ。ほらほら、見てください。ほらほらほら。あそこ、見えるでしょ？ 川
沿いの、ラブホテル。その裏、私の家です。

間。

男1 ……大変、失礼しました。

女2 ……

男1 あ、でも、中華がありますよ。いい中華。

と、男はおもむろにスマホを取り出した。
大きさにスワイプする。

女2 いい中華。

男1 食べログ、4・5越えです。

女2 すごいですね。／なんて、言ってるだけです。思ってません

男1 あれ、違った。3・6だった。変わったのかな？ ちょっと、盛っちゃいましたけど。いいんですよ。いい町でしょ。あ、中華、お嫌いですか。

女2 いえ、嫌いでも好きでも、ないかなと。

男1 そうですかあ。めずらしい。中華はみなさんわりとお好きと聞いてます。

女2 へえ、そうなんです。／なんて言って、でも、どうしようかなあ、なんて言って……わたしは、この人の前でなんとなく考えているふりをしてますが、実はもうあまり、考えていませんでした。このとき、わたしはもっと別のことを考えていました。

男1のスマホが震えた。

男1 あ、すみません。ちょっと失礼します。

電話に出る、男1。

男1 はい、ハシモト。今、カーサ・ヨクナパトーフア201……

女2 (小声で) 名前、長いな。

男1 はい、いま、お客さま内見中です。

女2 (さらに小声で) 覚えらんねえな。

男1 え！

と、男1は叫んだ。

女2 え？

男1 おい……マジ？ わー！ マジか…… (女2に) あ、ちょっと、すみません。

店舗からでして……ちょっと、いいですか。

女2 あ、全然。どうぞどうぞ。

男1 申し訳ありません、すぐ済みますので。はいはい……お客様？ いるよ。横にいるよ…… マジかよ……いまさ、まさにさ、お客様の、まさに、成約の瞬間だったんだけど…… はい、はい。アイシー、アイシー……あのさ、言わせて

もらうけど、なめてんの？ よく考えてみる……っっていうかさ！ おまえのミス
テイクだよな、だよな。さ、これ、そうだよな。頼むよ！ あ、ちょっと待て。
……（女2に）あの、お客様、あ、これ、記入カード、先ほど、書いていただい
た、はいはい、自由業と。これは、差し支えなければ、どういった。

女2 あ、っっていうか、

間。

女2 バイトです。

男1 あ、バイト？

間。

男1 ……じゃあ、バイトって書いていただければ。

女2 ……バイト、ダメかもって。

男1 ええ！ もちろんもちろん、全然、大丈夫です。問題ナッシングです。です
から、こういうのは、盛らなくて、大丈夫です。お任せください。すみません：
…（電話に戻って）お客様はね、バイトですよ……バイト。それがどういこと
か、おまえに、わかるか？ わかんないだろうな、おまえには。えらいよ、バイ
トのみなさんたちは。おれ、心底、そう思ってるよ。はい風邪ひいた、やれイン
フルだ、はい休みます、給料減って、ほら、ここで、できました、管理費。あれ？
なんか、わたし、今月、払えない。やばい。ちょっと、なんで？ って、なるわ
けさ。そのあと、どうする。考えろ。考えろ。おまえなら、そんな時、どうする？
そうだよ。武富士だよ。そんなとき、おまえ、責任、とれんの？ え？ 武富士っ
て今ないんだっけ？ なにそれ。じゃあ、アコムでいいよ。あつという間だかん
な。知らねえよ。っっていうか、責任とれないだろ？ レスポンシビリティ？ は？
だから、ケツまくれんの？ どっち？ 無理だろう？ そんなんだから、おれら
売買チームになめられんだよ。聞いてんの？ おれの話、聞いてんの？ 聞いて
た？ 聞いてない？ どっち？ ……ケッキョク、ヒト！ おれらの仕事は、ケ
ッキョクは、ヒト。わかったか？ おお、わかったんなら、いいよ。（急に優しい
声で）じゃ、はい、お疲れ様です。

電話を切った。

女2 ……

男1 ……お客さま、すみません。

女2 え？

男1 行き違いで。

女2 ……

男1 この物件、たった今、ほかのお客様で、仮押さえ、入っちゃって。

女2 あ、そうなんですか。いや、いや、別にそんな、いいんですけど。

男1 申し訳、ございません！

男1、土下座。

女2 いやいや、そんな。そこまで。頭をあげてください！

男1 ……でも、ぶっちゃけ、お客さま、実はまだ、いけます。

と、ガッツポーズ。

女2 え？

男1 今日17時までに入居を決めて契約書を書いてくだされば。先方の最終判断は17時過ぎるということで、それより前に、今、この場所で、決断していただければ、問題ございません。入居は可能です。いま、何時ですか？（腕時計を見て）16時45分。あと15分。

と、別の男がやってきた。

別の男と言っても、それは男1がそのまま演じる。

男1 別の人／お疲れですす。契約書お持ちしました。

女2 ……え、だれ？

男1 別の人／チョッパヤでダッシュで来ました。

女2 あ、今の電話の人ですか？

男1 別の人／超絶ダッシュで走ってきました。よろしくです。名刺です。わたくし、ハッピーハウジング不動産、多摩地区統括エリアシニアプロデューサーアシエイトマネージャー代理の、オオタと申します。

女2 ああ。

男1 いやー、もろもろ厳しめスケジュールですみません。店舗、無人だろ？もう、帰っていいよ。

男1 別の人／僕のシーキビミスイクで、すみませんでした。店舗戻ります。

男1 おつかれ！

別の人は帰ったようだ。

男1 ……では、お気持ち決まりましたら、手付けだけでも、ここでやっちゃいましょう。おっと、あと12分。ゆっくり、お考えください、ってね。……あー、そうだ。正社員じゃない方は、保証会社、入っちゃうんです。

女2 はい。

男1 入会費無料のクレジットカードを作っていたかまして、そこからの引き落としとなります。審査があるので契約までちょっとお時間かかっちゃいますけど。あと、お客さまのように、保証人がいない場合も。……いませんよね。

女2 いません。

男1 敷金一ヶ月増で、すみません。そこだけ、ちょっと、お願いしてるんですよ。ご了承ください。

女2 わかりました。

女2、水色の壁を触る。

静かに、触っている。

長い時間。

ややあって、女2は壁にもたれたまま動かなくなっていました。

男1 やっぱ、やめます。やっぱ、やめます。すみません。と、彼女は言いまして。あ、あ、あ、あ、あれ……どうされましたか。

女2 なんでもないんです。わたしの都合です。

男1 わたしの、あの、なにか、それは、あれですか。

女2 違うんです。すみません。

男1 これは、ええと、では、どういった。……彼女はしばらく下を向いていた。

長い時間が経った。12分という、短い時間、ずっとこのまま下を向いている

長い時間を。わたしは、無駄な時間だと思っています。

3・ドイ

舞台上の任意の場所にいた男2が、歩き出す。

男2 ツイッターのDM／『いいですよ。いつですか。』

女2 「DM」は知らない。そんな仲、なんです。

男2 は、女2の前にやってきた。

男2 お待たせしました。道迷っちゃって。

女2、ひとりで話を始めた。

女2 「ここ」に。「あの場所」から、「ここ」に。この町に。246から世田谷通りを走り、ひたすら走り、和泉多摩川という名前の駅の横を通り、多摩水道橋を渡りました。渡ってすぐに、左折して、緩やかな坂を降り、堤防の下、やあって、かなり暗い、静かな路地、夜、「ここ」に、この小さなアパートに、レンタカーで、やって来ました。結構、長い時間がかかりました。運転は、10年以上前、昔のバイトの後輩のドイ。思い立って、ドイに連絡を試みたのは1週間前。

道に迷う二人。

女2 一本道なのに、迷うもんだね。

男2 すみませんです。

女2 いいのいいの……。ドイは運転中、たくさん話をしてくれて、してくれただっていいか、

男2 地球上にバクテリアって、結局どれくらいいるんですかねえ。そう考えると、数って無量大数じゃ足りませんか？ 無量大数の上の単位、必要じゃないですか？

女2 わたしはあまり聞いていなかった。／そうだね。／もっと、別のことを考えていました。あれ？

男2 あれ？

女2 ……喋ってたからか。

男2 (超申し訳なさそうに) すみませんです。

女2 あ、違う、私が。私がつてこと。ごめん。／そう、でも、やっぱりわたしは別のことを考えていたのです。

とか言いながら、二人の乗ったトラックはどうやらアパートにたどり着いたようだ。

女2、男1と女1が住む202号室の玄関をノックする仕草。

女2 ……あの、わたし、隣に引っ越してきたものなんですが。

男1 ……

女2 夜分、すみません。ごあいさつといたしますか。つまらないものなんです。

男1 ……

ドアの向こう、気配はあるも(咳払いでも聞こえるだろうか)、しかし、声はしない。

女2 あれ。

間。

女2 ……ドアは、開かない。夜だしね。お菓子なんですけど、ここにかけときます。

ドアノブにお菓子の紙袋を引っ掛ける瞬間に、ドアが開いた。その勢いでおでこを激しくぶつける女2。

女2 痛っ！ ……あ、すみません。ハヤシと申します。
男1 ヤマダです。
女2 これ。

と、お菓子を渡す

男1 「ゆべし」？
女2 はい、ゆべしです。
男1 申し訳ないけど、ゆべしは。

女2、菓子の入った紙袋を突き返される。

女2 ……

男1 (小声で) 実はさ、妻がね、総入れ歯だから。ここだけの話。

女2 そうなんですか。

男1 一度、餅食べたら、ぱかっと入れ歯取れちゃった時があつてさあ。あはは。
私が言っちゃって、言わないでね、ものすごく、怒られるから。

女2 あ、はい。

男1 「ゆべし」って、ニツチャニツチャ、するでしょ。

女2 ああ、確かにニツチャニツチャしてますね。じゃあ、あの、こっち、これ、「ままだおる」、

と、リュックの底の方にあつたであろうポロポロのぺしゃんこの「ままだおる」を取り出す。

女2 あ、なんか、つぶれちゃってる……。すみません……。やですね、こんなの。

男1 出身？

女2 え？ あ、いや、違うんです。

男1 そう。

女1 (奥から大きな声) ゆべし？

女2 びっくりした！ ……この人が、総入れ歯の奥さん、ケサコさん。

男1 (女2に) 地獄耳。

女1 (玄関先に出てきて) まあ、ゆべし。うれしい。久しぶり。ありがとう。

男1 ままだおるだって。

女1 ゆべし、昔は「にっちゃんにっちゃん」してて好きだったんだけど……。

男1 ね。

女1 でも、もう、ちょっと、無理かもしれないね。

女1、しょんぼりしてしまう。

男1 だから、ままだおるだって。

女1 そっか。じゃあ、よかった。

男2 米粉パンもニッチャニッチャしますね。

女1 え？

男2 米粉パン。

間。

男2 (やたらはつきり) 米粉、パン。

間。

無駄にピリついた雰囲気となる。

男1、その不安定な沈黙を破るかのように、

男1 粉があるんだろ。ね！ 米の。

女1 ……どうということ？

女1、不安を隠せない。

女2 ドイ、確実に余計なこと言ったな。確実に余計なこと言ったな。

女1 (男2に) あの、すみません。お尋ねしますが、米のパンって……(どうい
うことでしょうか?)

男1 あ、あるんだよね、そういうのが。

女1 パンなの？ 米なの？

男2 (やけに堂々と) あ、100パーセント、パンですね。

女2 ああ、こう、なんというか、モッチモチなんですけど、ニツチャニツチャしてるんです。そうだよね？ あれ？

女1 ……

ドイはいつの間にかいなくなっていた。

無駄に気まずい、長い時間。

男1 ……何か、わからないことあったら聞いてください。

女2 ……ありがとうございます。

女1 あの。

女2 はい。

女1 散歩に行かない？

女2 え、今ですか？

女1 今度。

女2 ああ、ぜひ。

女1 うれしい。あなたみたいな若い人が来てくれて。川べり。ちょっと歩くけど、薔薇の咲く公園もあるの、うれしい。今度ね、今度、案内してあげる。

女2 ああ、よくわかんないけど丸く収まりそうだ。よかった。はい。ぜひ。あの、これ、よかったら(と、ペしゅんこのままどおるを手渡す)。

男1 じゃあ、どうも。

女2 あ、すみません、お時間とらせました、と、言ったか言わないか、で、ドアはボタンと閉じ、そして、すんと、気配が消えました。ドアの向こう、夫婦が住んでいる。表札に「山田」の2文字。

男2 やっちゃいました。

女2 ドイ、ひとりでレンタカーを返しにいき、2トンを電柱にぶつけます。

男2 すみません。やっちゃいました。

女2 でた、ドイ、でた！ /って、思ったけど。/え？ 大丈夫だった？

男2 2トン、初めてだったんで。

間。

女2 え？ そうなの？ あれ？ 昔、引越しのバイトしてなかった？

男2 それはニタドリさんですね。

女2 そうだっけ。／ニタドリって、誰だ。

男2 すみません……ハヤシさん、保険おりするし、擦っただけだし大丈夫大丈夫なんていってくれて。そして駅の近くのホルモン焼き屋で、二人でビール、ホッピー、ハヤシさんが、奢ってくれました。バイトの時は、二人じゃなくて、他の人も、もちろんいて、五人ぐらいで、たまに飲みについて、休憩中にも話もしましたが、ハヤシさんは、いつの間にか、バイトを辞めていたんだけど、それはあとから、いろいろあって、ハヤシさんはクビになったと、店長から聞きました。それが結構きつい話で。でも、その話の核心を、ぼくは、すっかり忘れています。女2 ドイはひたすら話をする。私は、肉を焼きながら、聞いている、感じを装いながら、あまり聞いていません。

女2、おもむろに、

女2 地震？

男2 あ、ぼくです。

男2の手が、小刻みに震えていた。

間。

女2 ……そうか。

男2 でも、また、漫画描こうって。

間。

女2 わたしたちが一緒に働いていたのはもう、何年前のことだろう。

男2 言いませんでしたっけ、プロ目指してたこと。

女2 ああ、そうなんだっけ。／でも、そうだ、ドイは確か、バイト中にアムウェイだ。新宿東口の、今はもうなくなってしまった、確かロッテリアの上にあった古い喫茶店で、説明受けて、バイト先に、こんな分厚い、アムウェイのファイルを持ってくるようになって。それで、しばらく来なくなったんだ。しかし、そのことは、もちろん、いま、ここでは言わない。わたしは絶えず、なににも集中できず、なお、別のことも考えています。

男2 見ます？

女2 え？

男2 アカウント、あるんです。この名前。裏アカなんですけど。これです。これ、これ、あ、これ、ちょっとやばいんで、ばれると。内緒にしておいてください。

女2 誰に？

男2 見ます？

女2 いいの？

男2 いや、どうしよう。

女2 どっち？

男2は考えている。

長い時間。

男2 見てください。

女2 長っ。

男2 どうかなって、ハヤシさん。

女2 どういうこと？

男2 いや、ジャンルとか。

女2 ああ、ジャンルか。厳しい？

男2 いや、大丈夫だと思うんですけど。

男2の差し出したスマホの画面を見る二人。

長い時間。

男2 ……そうですか。

女2 と言って、ドイは小田急線に乗って、町田まで帰った。帰ったはずですが。わたしは、部屋に戻ります。カーサ・なんちゃら201。パタン、と、ドアを閉めて、ベットはまだありません。買わないかもしれません。

女2は小さな座布団を尻にしき、そこからゴロリと横になった。

と、どこからか唸り声^{うなりこゑ}が聞こえる。

女2 聞こえる。

間。

そして、突如うずくまる、女2。

男1 地震か？

女1 地震ね。

まるで地震に抗うかのように、彼女もずっと唸り声をあげていた。

再び長い時間。

ややあって、女2は静かに起き上がる。
地震は終わった。

4 ノボル

カーサ・ヨクナパトウファ202号室には、男1と女2。どうやら先ほど女2が菓子を届けた後の時間らしい。

女1 もっさもっさしてたねえ、ままだおる。どうかね、あれ。

男1 甘過ぎないね、そこがいい。

女1、男1がことのほかままだおるを褒めたので、

女1 甘過ぎないね。

しれっと、意見を変えた。

男1 上品な味だ。

女1 ますますお腹すいたね。

男1 さっき弁当食べたじゃない。

と、急に、男1はひとりで自分の話を始める。

男1 隣の部屋に越してきた、今、隣の部屋で、眠っているであろう、彼女が越してきたのは今。そう、今から10年以上前になるでしょうか。私たちはかつて住んでいた土地から、この町に引っ越してきました。どこでもよかったです。しかし、水があって、気持ちがいいね、川を隔てて、こちらがいいねと、妻が言った。水があるって、とてもいいこと。散歩にいけるねと、妻が言った。家賃が安かった。なんでも、以前このアパートで孤独死があったとのことで、安くなっていると言われた。そんなことは、どうでもよかった。国からのお金も少し出た。小さなアパート。カーサ・ヨクナパトウファ。

女1 いい名前。

男1 ここにしよう。働いたよ。だって、アルバイトだもの。だって、だれも雇っ

てくれないもの。警備員。これが辛かった。50過ぎての警備員。たまに、本を読んだよ。わたしはね、実は文学青年だったのね。漱石、藤村、鴉外、チェーホフ、と、なんでもなんでも読みました。それしかなかったもの。楽しかったね。休憩中、夏の暑い日、冬の寒い日。本があればそれでよかった。たまに、劇団入りしたいな、新劇やりたいななんて思ったりもして。一回だけ、妻に内緒で、文学座と俳優座と民藝と青年座、受けたりして。内緒だよ。ふふふ。なんだろね、あの気持ち。すぐ、収まるんだけど。全部落ちて、そのまんま。

男1の体が静かに、歪んでいく。

男1 単身で、住み込みで、原発にも、行ったのよ。作業員。だって、生まれたところだから。わたしの生まれたところだから。

男1、身体を走らせる。

男1 タッタッタッタッタッタ……

突如、男1の目の前に海の景色が広がった。

男1 ……見て、海！ わたしのね、生まれたところなの。海の水、ここから見ても、綺麗でしょう。綺麗なんだよ……そう、見える？ あれが、燈台。

男1の目の前に、新聞折込チラシのようなものを手にした男2がいる。

男2 (チラシを高らかに掲げ) クリエイト見てきました！ やばしやばし！ 借金払えず！ やばしやばし！ なんつって。

男1 (男2を指し) 現場で仲良くしてくれた、50歳のクルマダくん。クルマダくん、痩せたな。大丈夫か？

男2 明日、過払金の申請しようと思ってんすよ！

男1 へえ。

男2 20年前のキャッシングでも100万以上還ってくる人もいるらしいっ

す！

男1 ……からだ、大丈夫か？

男2 まあ、そうは言っても。ね。やらなきゃだめっしょ、この仕事。

男1 そうだなあ。

男2 誰かがね。

男1 誰かが。

男2 ダーヤマさんも一緒にがんばりましょうよ。これ、どうぞ（と、カバンから

「しじみ習慣」を二箱出す）。

男1 え、くれるの？

男2 二箱、無料なんで。

二箱のうちの一箱だけを男1に渡して、クルマダは満面の笑顔で去っていった。

男1 ありがとう。いいやつだな、クルマダくん。いいやつなんだよ、クルマダくんは。この二日後、結局ね、現場を去っていったんだけど。

ややあって、

男1 あ、でも、この話、やっぱ、全部、なしにしてくれるかな。

男1は女2に向かってそう言ったが、女2は黙っている。

女2は話を聞いていたのだろうか。

男1は、ゆっくりと、目の前に広がっているであろう海を見た。

長い時間。

男1 （独り言のように） ……海の水、ここから見ても、綺麗でしょう。見える？

そう、あれが、燈台。もしもし、今日登戸帰る。ただいま。

女1 おかえり。どうだった？ 海。

男1 綺麗だったよ。泥のように寝た。

女1 あなた、帰ってきてから、本当に長い時間、眠っていたのよ。

男1 そう。

女1 ごはん、どうする。

男1 給料日にはたまに外食に行った。数えるくらいだけど。妻がけっこう、食べるんだ。びっくり？

女1 びっくり？

男1 違うな、ドンキーだ。

女1 何言ってるの？

男1 びっくりドンキーだ。

女1 行く？

男1 いや、

女1 ハンバーグでしょ？ ちょっと若向けね。

男1 とんでんは？

男2 とんでんか。

男2、いつの間にか着替えて、男1と女2の会話の輪に加わっている。

男2の名前は、ノボル。

女1 やだ？

男2 いや、なんでもいいよ。

男1 思い切って、回転にするか。

女1 回転ね。ヤス回転？

男1 給料日だもの、タカ回転、さもありません。

男2 回転か。

男1 回転、いやか？

男2 いや、なんでもいいよ。

男1 中華は？

女1 中華ね。

男1 餃子、あるかな。

女1 あるでしょう、普通。

男1 ないところ、ないか。

男2 餃子か。

男1 え？ 餃子もダメか。そうになると、もういよいよどうしていいかわからない
おれ。食べるもの、なし！

男2 いや、なんでもいいよ。

女1 いやなのね。

男2 いや、なんでもいいよ、いざとなったら、頼まないで、水でいいし。

女1 ……そんなの、じゃあ、よそうよ。行くの、よそうよ。もういいよ。

男2 おれのことは、いないと思って。気にしないで。

間。

男1 じゃあ、そばは？

男2 蕎麦？

男1 おっ！ 反応がいい。

女1 じゃあ、美味しいお蕎麦、食べよう。

男2 蕎麦か。

男1 じゃあ、蕎麦だ。

男2 ま、別にいいけど。

女1 わたし、二八。

男2 おれ、十割。

女1 かたくない？

男2、女1の言葉に反発するように、

男2 それがいいんじゃない！ だって、二八は、2も小麦粉入ってるんだよ？ そ
んなの、蕎麦じゃない。ダメ。乾麺だって、裏の表示、見てる？ 見てない？

と、女2を詰める。

女1、困惑し、首を振る。

男2 見なくちゃ！ 見なくちゃ！ あれ、含有量の多いものから表示されてるわ
けだけだから。原材料…蕎麦粉、小麦粉ってやつ買わないと。小麦粉、蕎麦粉じ

や、本末転倒だから。

女1 本末転倒？

男2 まあ、おれは、そもそも論、小麦粉って書いてあったら、買わないけどね。だって、それ、蕎麦じゃねえじゃん、っていう話。

女1 そんなことないでしょ。

男2 まあ、そうだけど、大きな目で見ればそうだけど、それに蕎麦粉はさ、体にもいいの。知ってる？ ルチン。血管にいいの。知らないでしょ。だから、食べなきゃだめなの。ママもさ、サプリ飲んでも、効かないよ。食べ物から摂らなくちゃ。書いてあったよ。(男1を指差して) あ、うどん派だっけ？ あんな小麦のかたまり、ほぼグルテン。グルテンって、知ってる？ 知らないか。知らないよね。あれね、毒だよ、毒フード。正直、よく食べるよなあって思うよね。

男1 こいつ、なあ、なんだろうな、って、思ったけれど、ノボルは、わたしの息子のなだった。「うどん、いいじゃないか。小麦粉、最高！」そう言って、笑って見せました。

男2 「さぶちゃん」、踏切渡った。

女1 「さぶちゃん」って蕎麦屋なの？

男2 違ったっけ。

女1 川向こうの「丸屋」いいじゃない。久しぶりに、川渡りましょう。散歩がてら。橋、渡ろう。それともバラ園のほうに行く？ あっちにも「そばっち」っていうのがあったよ。別に美味しくないけど、それもいいじゃない。ねえ。

男2 「そばっち」かあ。

女1 いや？

男1 じゃあ、明日、気持ち、遠出しようか。三人で。

男2 遠出？

女1 いいね、行こうよ。景気良く旅行といきたいところだけど、あれだし、ねえ。

男1 昔行っただなあ。三人で、金沢。

女1 楽しかった。

男1 楽しかったな。ノボル、まだ小さくて。ママが、なんでだっけ、川のほとりで、転んで血まみれになって。ごろごろーって。なんだったんだ、あれ。

男1、話しながらその情景を思い出して笑ってしまう。

女1 (笑って) 道に迷ったのよ。

男1 そうだっけ。

男2 ……おれ、いいや。

女1 なんて。

男2 いいよ。

女1 行けない？

男2 天気、悪いし。

女1 まだ、わかんないじゃない。

男2 二人で、行きなよ。

女1 ……

男2 頭、痛いし。

男1 大丈夫か。

男2 まじ、いてえ。

ノボルが、二人に背中を向けて「頭が痛い」という仕草。

それを見ていた女1が、

女1 いいよ。わかった。

男2 ……。

女1 行かない。

男2 ……。

女1 別に行きたいわけじゃない。あんただってね、きっと、病院行かない。今ままでだって、自分で行ったためしがない。そうやって、行かない。

男1 ……もうそろそろ、薬ないだろう。

男2 ない。

男1 一緒に病院まで行ってやろうか。

女1 ひとりで行きなよ、いい大人が。

男2 行くよ。

男1 明日の午前中、行こう。

男2 やることあるから。

女1 やることなんてないでしょ。

男2 あるよ！

大きな声だった。

男2 なんだよ。あるよ。やること、あるよ。

長い時間。

女1 ごめん。

男2 あるんだ。

男1 あるよな。

女1 わたしが、悪い。

男1 ママも、知らない町で、疲れてるんだ。

女1 疲れてない。

男2 おれが、悪い。

男1 悪くないよ。

その三人を見ていたのか、女2は誰にともなく、話し始めた。

女2 だれも、悪くないよ、って思って、彼は思ったけど、いや、もし、悪いとい

う言葉が、「もし」存在するのだとしたら、だとしても、じゃあ、それは、一体「ど

こ」にあるのか、彼は、そう思っているんだけど。

男1 行こう。

女1 どこへ。

男1 散歩だよ。三人で。川べり行って、ローソン行こう。

女1 真っ暗よ。

男1 大丈夫。ほら、月が出ている。明るいよ。

女2 そうなんです、これは、今日のことではなく、彼らがまだ三人で住んでいた
ころの時間の話です。男性はその日のことを今、思い出しています。カーサ・ヨ

クナパトーフア202の二人は、いや、……三人は、ここに今から12年前から住んでいて。そう、12年前、彼らはこの地に移住してきました。それまでは、どこにいたかというと、今はもうなくなってしまった「とある町」にいました。それが、どこなのか。あなたも、きっとわかっているはずですよ。

女1は、男2にマフラーをかけてやる。

男2は、父と母と、今まさに散歩に行こうとしている。

しかし、玄関の前、男2はドアノブに手をかけるも、そこでうずくまっ
てしまった。

唸っている。

立ち上がれない。

彼は、「どうしても」家から出ることができないのだった。

男1 ノボル。

男2 大丈夫。

照明、変化。

暗くなる。

ここは、また別の「土地」。

女1 ……キヨシ、ユウコ、ヤスオ、ここからまだまだ長い。でも、はりきって
行こう。お母さんが歌を歌ってあげる。

女1、ハミング。

立ち上がれないでいた男2の upper body を持ち上げ、男1と男2の手を引いて

歩き出す。

暗い中、その歩みはゆっくりと進む。

女2は、その三人についていく。

女2 さらにもっともっともっと昔に山田さんの奥さん、ケサコさんのお母
さんが、満州大陸から、自分の子供を抱きかかえ、右手にひとりキヨシ、左手に

ひとりユウコ、手を繋いで帰ってきたときに、満州の奥地から毎日数十キロひたすら歩いて、歩いて、歩き続けて、野宿し、大連／ダーレンを目指した時のように、その時に紐で胸に括り付け、落ちるお尻を何度も何度も持ち上げ抱きかかえた2歳の息子ヤスオが赤痢で死んでしまったときに、それでもなおただひたすら目の前の暗い道。屍を踏みつけ、見えないもの時にたくさん見ながら、降りかかる身の恐怖に怯えながら、もうこの二人の子供の、この小さな手を、死んでも、離さないように、死んでも死んでも死んでも、餓死させないようにと、ただひたすら歩いてきたときのように。ケサコさん、は、思い出します。あの時の母は、まだ30歳を超えたくらいの年齢ではなかったか。そう、山田ハチロウさん、ケサコさん夫婦、は、わたし、ハヤシがこの地に引っ越してきた日から、5年前に、息子を、亡くしました。

女1 あっ。

握っていた二人の手は、離れた。

女2 あっけなく、彼は、ノボルさんは、病気で、がんで、死んでしまったんです。

男2 はゆっくり、群れから離れていく。

やがて、力尽きて、倒れてしまった。

女1 ノボル。

女2 今から、5年前のこと。そう、彼が死んでから、5年後に、わたしはこの、カーサ・ヨクナパトーフアに引っ越してきます。

男2 **ばさばさばさばさばさ。**

女1 あっ。

男2 の亡骸から、腹を突き破り、夥しい数の鳥が飛んでいく。

女1、空を指差し、その鳥の数を数えた。

女1 一羽、二羽、三羽、（しばらく数えているが）数えきれない、いや、数にする
と、無量大数ではまかないきれない数の鳥たちが。

女2 うねり、群れを成す、彼ら。群れの形は変わり、そしてあっという間に、見えなくなった。

その鳥たちの行き先を見つめる、男1。

男1 灯台に行ったのかもしれない。

女2 ノボルさんはこのようにして、この地で、この川のほとりの地で、39歳の命を終えました。それは、わたしがこの地に引っ越してくる、ちょうど、5年前のこと。そしてその5年後、今、海の彼方で、大きな戦争が始まります。すなわち、この多摩川のほとりにある、ほんの小さな町にもその戦争のニュースが届きます。海に向こう、遠い国のどこかでの、話。あなたはそう思っているんでしょう？ そのとおり、これだって、あなたが知らない、土地の、話。ノボルさんが亡くなって5年後。

四人のフォーメーション、変化。

男2は先ほどどこかに脱ぎ捨てた服を着て、ノボルからドイに戻る。

ここで、ハヤシが引っ越してきた日の202号室の玄関となる。

女2 あの、わたし、隣に引っ越してきたものなんです。

男1 ……

女2 あの……夜分、すみません。ごあいさつといたしますか。

男1 ……

女2 あの、これ、ゆべし、っていうか、結局3日前にバイト先でもらってバッグに入ってしまったになってたこのつぶれたままどおるっていう結果に終わってわたしの的にはガツカリなわけですが。

5. 再びのドイ

男2、ひとり、話を始める。

男2 はい、どうも、ドイです！ 僕は、ハヤシさんの引越しの日、ハヤシさんと別れて、急行で、町田に帰りました。駅から相当歩いて……路地に入ります。街灯ないんで、自分でもたまに迷います。迷いますが、路地の奥の突き当たりの、小さな軒家です。父と二人で住んでまして。……真っ暗な路地を、そう、たまに、深夜、ひとりで、散歩もします。ぬかるみだ。(少し躓いて) あっ。よごれちゃった。大失敗。ここはいつでもぬかるみなのに。いつもよごれちゃうんです。長い時間、歩いてます。そう、父はね、そう……食べることが大好きなんですよ。特に、甘パン。甘いパン。

男2の手は、震えている。

男2 食わせろ食わせろ。はいはいはいはい、食わせろ食わせろ。はいはいはいはい。なんか、買ってくるね。一緒に食べます。そして、しばらく、ずっと、絶えず、別のことを考えています、急にね、急に、急じゃなかったのかもしれないけど、なぜか、ハヤシさんに連絡しました。引越しのあと、1年ぐらいは、経ってたでしょうか。別にハヤシさんのことと好きとかじゃないんです！ まじで。引越しの日には、そんなこと別に言わなかったけど、バイト中に、二人きりで話したこと、あるんですよ。

男2、笑っている。

嬉しそうだ。

男2 僕らは二人で、休憩室でタバコを吸ってました。……別に一切なんにも、ないですよ！ ただ、映画の話をしただけなんです。それだけです。30分ぐらいの、短くて、長い時間。思いつく『何だったんですか、あのどうでもいい退屈で幸せな時間は！』なんてことは、もちろんメールには書かなかったし、

これから、一体どうすればいいんでしょうか、そんなことは言わない。おれは、そういうことは絶対に言わない。もうだめだ、なんてことは、絶対に言わない。

女2、男2のセリフの間、なにやら楽しそうに話をしているように見えるが、それはドイと好きな映画の話でもしているのか、その姿。

男2、夜の街を徘徊する。

男2 夜、極夜。星が見える。あれは、ポラスタールか、なんつって。ここは、とても、静かだ。水の香りがして、気持ちが悪いなと、僕は思います。このままファミレスでも行きたいけれど、今はどこもやってません。どこからか、音が聞える。(また躓き) ああ、ぬかるみだ。またよこれちゃった。大失敗。

男2、ぬかるみにはまり、動けなくなってしまったようだ。

女2 『ハヤシです。久しぶり。突然だけど、2トン運転できたよね。引っ越ししたいんだけど、手伝ってくれないかな。』

男2 『いいですよ。いつですか。』あれから、1年。

何度も立ちあがろうとするも、それができない男2。

長い時間。

ややあって、何事もなかったかのように、立ち上がった。

舞台上にある椅子(脚立)を持ってきて、座る。

男2 『引っ越し、楽しかったです。ありがとう。』って、おれの写真もつけて、と。近影、はい、自撮り(と、スマホで自分の顔の写真を撮影する)。おれの顔、送信。

ヒー、ヤバシヤバシ、送信削除。

女2 ツイッターのDM『ハヤシです。お久しぶり。』

男2 返信来ちゃった！ まじ、ぜんぜん、削除、じゃねえ！ ヤバシヤバシ！ 超

ヤバシ！

女2 ツITTERのDM／『これから、家行きます。一階のリーさんがタダで送ってくれるらしいんで(タクシー運転手なのです)、住所教えて。ひとまず、町田に向かいます。』リーです／ハヤク、ハヤク！ すみません。リーさん、お仕事いそがしいのに。いいんですかあ？ 甘えちゃって？ リーです／(少々なまりのある英語で) ノープロブレム！ エマーージェンシー！ (女1の横に駆け寄り、女1として) 「早く行ってあげて」、(男1の横に駆け寄り、男1として) 「早く行ってあげなさい」 ……はい、ありがとうございます。リーです／ハリーアップ！ ハリーアップ！ ……待ってろ、ドイ。登戸から町田まで車でたったの30分だ。男2 ツITTERのDM／『今から行きます。待っててね。ハヤシ』

音楽が流れる。

どうやら女2はリーさんの運転するタクシーに乗り込んだ。

女2は、手を大きく広げた。

それはまるで鳥の翼のようでもある。

タクシーは飛んで行った。

6・ハチロウとケサコ／長い長い時間

音楽、消える。

そして、さながら、この舞台のオープニングにループしたかのように、

女2 ここはカーサ・ヨクナパトーフアです。

女1 本当に寒いね。

男1 静かだな、今日も。

女2 二人は今日も、同じ話を繰り返しています。

女1 お腹すいたね。

男1 すいたな。

女1 どうする？

男1 どうするかな。

女1 ……ねえ。どうする？

男1 ああ。

女1 なんかも食べたい。

と、男1、エコバッグから、本を取り出す（古本／ウィリアム・フォー
クナー「響きと怒り」）

男1 じゃーん。

女1 どうしたの？

男1 買った。

女1 本買ったの？

男1 買った。

女1 読めないの？

男1 遅くまで、やってんだよ。驚いたね。

女1 ……

男1 どうした？

女1 ……この本、110円キンイチ？

男1 ……

女1 違うの？

男1 百均は、松村とは逆だろ。

女1 そうじゃなくて、これは110円キンイチかって。

男1 だから、キンイチじゃないよ。キンイツ。

女1 110円キンイチじゃないの？ じゃあ、一体いくらしたの？

女1、本をひっくり返す。

女1 ああ、ベタベタする！ ここが、ベタベタする！

男1 ……だから、ふきなよ。

女1 ばかやろう。

男1 ……

女1 ……言い過ぎました。ごめんなさい。

男1 いいよ。いいよ。全然、いいよ。

女1 あと、あれ買ったよ。通販で。

男1 また？

女1 ノボルが開発したんだって。わたしのためにつて。

男1 あれは、ノボルが作ったわけじゃないし、薬じゃないだろ。

女1 そうなの？

女2、また、話し出す。

女2 このアパートは一階、二階建てです。小さな、アパートです。4つの部屋があります。今はこの二人と、ふたり、と、隣が、わたし。あと、一階。中国人の、リーさん。猫のベンシー、キャリー、クエンティン。犬のタロウとコウメちゃん。そんなにいるんだ、リーさんち。

女1 (呟く) 薬じゃないんだ。

女2 もうすっかり寒くなっていました。ものすごく暑い、気が狂いそうな日々から、ある日突然、気温が下がって、ふと、みな、呼吸をして、秋を感じたことで

しよう。こうやって、いきなりね、まいるね、季節って変わるんだっけ、なんて言いながら、この町の、小さな町の誰もが、そのように思ったはずですよ。実は、去年も、そうやって、ある日突然、気温が下がったんですよ。……それを、みな、誰もが、やっぱり忘れてしまったんです。昨年のことなど、もう、すっかり忘れてしまったのです。なにもかにも、忘れていきます。

女1 ばかやろう。

男1 ばかかなあ。

女1 そんなこと言わないで。

男1 散歩に、行くかい？

女1 うん、ちょうだい、ソフトサラダ。

男1 カブキアゲならあるぞ。

男1、エコバックからおつかいで購入したであろうソフトサラダを出した。

男1 (パッケージをぐっと目に近づけて) これは……なんだ？

間。

女1 ソフトサラダよ。触ったら、わかるでしょ。

男1 ふーん、そうか。

ソフトサラダの袋を、男1は一生懸命触っていた。指で、せんべいの感触を探しているようだ。

それを見ている女1、ややあって、快活に話し始めた。

女1 (女2に) ……というのもね、自分では自分のことがよくわからないんだけど、夫のことは、わかりましたよ。この家に引っ越してきて15年ぐらいでしょうか。夫が、突然、死にました。

男1、目を押さえながら静かに倒れた。

女1 わたしの／世話を／している／ある日／突然／真夜中にね。目の奥が痛い、殴られたように痛いって、言ってる。わーって、大声で叫んで。苦しんで。壁、ドンドンドン。ハヤシさん！ ハヤシさんと、一階のリーさん、助けてくれたの。タクシーで、宿河原のほうの大きな病院に連れて行ってくれた。あの時は、何から何まで、ありがとう。

女2 なに言ってるんですか、ケサコさんとわたしの仲じゃないですか。

女1 そうね。

女2 そうです。

女1 わたし、ハヤシさんとリーさんって、とおってもお似合いだなーって思ってるんだけど、お世話するから交際考えてみたらって言ったたら、やめてください、わたし二度とそういうの、もういいんです、って、そう、でも、大丈夫よ、って言ったか言わないか、もうそんな話をしたかしないか、そのあたりはすっかり、ぼんやりしている。忘れてしまった。……ハヤシさん、ねえ、散歩に行かない？

女2 え？

女1 はリュックサックを背負った。

(男1の持ちものであるエコバックの中に、小さなレディースリュックが入っている。それを引っ張り出して背負うなど)

女1 夢の中でわたしは歩いていきます。わりとしっかり、歩いていきます。(リュックを触り) おにぎり100個作ったの。だから、大丈夫。夫と……

女1、倒れた夫に触れる。

動かない。

間。

女1 夫と、ハヤシさん。ハヤシさんの友達も呼ぶ？

女1は、健やかに楽しそうに話している。
まるで若さを取り戻したかのようにもあるだろう。

女2 「友達って誰だ?」とちょっと考えて) ……ドイ? ドイはいいですよ、町田だもん。

女1 リーさんもおいで。

女2 あ、リーさん。猫を抱いている。

女2、猫を抱く仕草。

それで、女2は一階に住むリーさんになった。

女1 その猫は、確かベンジー。そんな名前。リーさん、泣かないで。ね、泣かないで。

女2 リーさん／ベンジー。

女1 ベンジー。

女2 リーさん／ベンジー、ベンジー、ベンジー、返事してくれよ、ベンジー!

リーさんは泣いていた。

それを見た女1、

女1 (静かに猫に手を当てて) よく頑張ったね。 ……一緒に行こう。みんなで川辺に葬ってあげよう。ね。それから、犬も、鳥も、ねずみも、ひつじも、ロバも。森から降りてきたイノシシたちも。

男1 (イノシシ軍団／起き上がって) え、イノシシですけど、おれらもいいんすか?

女1 もちろんよ。たくさんいた方が楽しいじゃない。

女2 おおかみ、ヤギ。へび。ハシビロコウ。近所の子供、川辺に住む人。え、まじすか。おれらも、いいんすか?

女1 (うなづく) そして、どんどん、増えてきた。何だかさっぱりわかんない、これ、ただの散歩のだけど、

そうやって、イノシシ軍団も近所の子供達もみんな行列に参加していった。

やがて、多摩川の川辺に長い長い行列ができています。

男1、女1、男2、女2、みな、その行列の中を歩いている。

女2 おにぎり、足りませんかね。

女1 あれ、ノボルだ。

男2 ヘイヘーイ。

女1 長い長い列の、最後尾で、写真撮って。浮かれてんのね、あの子。

男1 ああ、そうなの。

声が聞こえる。

夫の背中をその行列の中に見つけた妻は、

女1 パパ、こっちよ！

大きな声で、夫を呼んだ。

しかし男1は振り返らない。

沈黙。

女1は遥か遠くに行ってしまうであろう男1の背中をただ眺めていた。

ややあって、

女1 (自分自身に呟くように) 川べりを歩きます。夜、夫は目がほとんど見えてなかったんですって。知ってたけど、言わないから、黙っててあげたの。

どこからか、音が聞こえる。

唸り声のような、川の流れる音のような、海鳴りのような、どこか遠くから聞こえる小さな叫び声のような。

女2 ……あ。

男1 ……聞こえる。

ややあつて、

女2 ……ケサコさん、橋、渡りますか？

女1 バカヤロウ。

女2 また言ったよ、この人。

男1 こうなったら、言い続けるんだ、バカヤロウバカヤロウって。なぐってくるんだ。年をとるって、困ったね。

女2 そうですか。

男1 さすってやるでしょ、嫌がるの。コワイって。

男1、女1に触れる。

と、その瞬間、

女1 ヤメロサワルナ。ヤメロサワルナ！

女1が叫んだ。

女2 ……もしかして。

男1 え？

女2 嫌なんじゃないかな、いろんなことが。

男1 ……

女2 触られることも。

男1は、女2の言葉を聞いて、改めて女1を見た。
老いた姿。

間。

男1 ごめん、恥ずかしながら、気がつかなくなった。そうだよね。そうだよね。ごめんね。

女1 (首を振る)

男1 ……おむつを替えよう。たくさん出たね。すっきりしたね。

女1、男1の腕をぐっと掴む。

男1 (その掴まれた腕を見ている)

女1 ありがとう。

男1 ああ。

女1 ……。

男1 少し、疲れたな。

女1 うん。

男1 もう少し、歩こうか。

女1 うん。

二人は、歩く。

女2、ややあつて、

女2 ……わたしが引越してきてから3年後に山田ハチロウさんが亡くなり、その後、あとを追うようにして、1年後。ケサコさんも、亡くなりました。このアパートから少し先にある、小さな施設で。亡くなりました。

男2も、女2も歩いている。

四人は、ただ歩いている。

その歩みは、舞台上でいつしかサークルになって。

男1 そうです、みなさん。わたし、ハヤシ(女2)も、じつはこの小さなアパートで、亡くなります。倒れて、3日後、引越してきてから、12年。ダブルワーク。少し、疲れていたのかな。やれ、風邪だ、やれ、インフルだ、給料減りま

す。あれ、管理費、どうすんの？ ってね。最後、わたしの家の鍵を開けたのは、不動産屋のハシモト。キッチンの青い壁にもたれて、わたしは死んでいました。少し早かったかな。でも知ってた。予感はしていたの。みんな、遅かれ、早かれ、死ぬ、あきらめます。遅かれ、早かれ、還ります。やがて、このアパートも取り壊されます。小さなアパートは思います。さよなら。土は思います。ありがとう。更地になりました。ここは、更地です。誰も、いません。……それから、さらに、100年後。ここに、この、何もない、ただっぴろい、汚れてしまった、荒れ野に、現れたものがありました。

女2 まさか、ベンジー？

女1 まさか、ノボル？

女1、その荒れ野の先を見つめる。

誰か、遠くから歩いて来た。

やっぱり、ノボルだ。

私の息子だ。

それはもちろん私の見た幻であったとしても。

女1 ノボル。

男1 家が建った。また朽ちた。そしてまた、100年後。

おもむろに、男2が舞台上のものを片付ける。

気がつけば、舞台上に存在したすべてのものがなくなっていた。

ラグマットも脚立もアパートの看板も、何もかもが消えた。

男1 ここには、一切、なんの息吹も、消えきった。

間。

男1 何もない。

ただ立つ、男1と女1。

ややあって、

女1 (土に向かって) ノボルに会ったら、こう言おう。「わたしは、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前におく。あなたは、いのちを選びなさい」

男1 「あなたは、いのちを選びなさい」 はい、そうします。……ふと見てみて。川の堤防を散歩している、人が、人たちが、います。先頭にいる、あれは、おじいさん、おばあさんの手をとって、そして、走って、走って、走って、走って、駆け登った。駆け登って、堤防を登り切り、突如開けた、風景を、川を眺めました。真っ暗ですが、わかります。いいところだ。

女2 (堤防を登る) タッタッタッタ…… (登り切った) ああ……いいところでした。ここは、本当に、いいところ。ここに、住もう。

間。

照明、変化している。

間。

ただ照明の小さき光はかろうじて舞台上の俳優の姿をシルエットで映し出していた。

まるで幽霊たちのようだ。

女2 『ハヤシです。久しぶり。突然だけど、2トン運転できたよね。引っ越ししたいんだけど、手伝ってくれないかな。』

男2 ……『いいですよ。いつですか。』あれから、1年。

男2、光と暗闇の中で。

男2 どうも！ ドイです。だから、僕がハヤシさんの引っ越しの1年後、今からもう10年以上前に、家中の薬を全て飲んだ時、飲みきった日に、結局ハヤシさんは町田には来なかった。一階の人が運転するタクシーがエンストして、動かなくなつたという。あるかねえ、そんなこと、と思つたけれど、『大丈夫です。ありがとうございます。ちょっと大変だったけど、全部きれいに吐けました。ハヤシ

さんのおかげです』そんなメールをしたかしないか、忘れました。僕は、それから、たまに、ハヤシさんと飲んだ日のことを、思い出す。今、ぼくは、まあ、働いているっていうか、そうですね、まあ、なんやかんやバリバリやっていますけど。何故か、どこからか聞こえる、小さな声で思い出すんだ。不思議でしょ。こんなふうに。あの日のメールの返信、『手が震えてでも、漫画描こう。続けることは、大変だけど、誰が読まなくとも、描き続けよう。ドイならできる』

女2 そんなこと、書いた？ そんなこと、書いた記憶はもうとうに消えてしまったのだけど。

男2 あの日、登戸駅のホルモン焼き屋で、ハヤシさんが言いました。

女2 いいんじゃない？ ねえ、まじでさ、わたし、今日、助かったわ。ありがとう。ドイ、なんで、引き受けてくれたの？ドイのおかげで、今わたし、この町に引っ越してこれたんだわ。逃げて来れたんだわ。ここからは、これは口に出さなかった。これから、わたしはさ、ドイがどんな状況になっても、わたし、助けるわ、だからと言って、ドイ、それをプレッシャーに感じなくていいんだわって。わたしも、忘れちゃうと思うから、今日のこと。でも、きっと思い出せると思うの。ドイは思う。ハヤシさん、引っ越し、よく頑張ったね。ハヤシさん。あの日、踊ってましたよね。踊ってねえし。

男2 踊ってましたよ。こうやって。手を振って、僕に手を振って。ハイハイ。ハイハイ。ごく小さな声で／聞こえないほどの声で／さみしい／さみしい。ねえ、ハヤシさん、死んだ後にも、会えますか。

女2 なにそれ、生きてる時から、会ってないよね。まあ、とにかく、連絡ちょうだい。エンストの日、それ以来、ドイから、連絡はないのだけど。

物語はここで終わる。

了

引用…P48斜文字ノ「申命記」30章19節

参考文献…

ヴァージニア・ウルフ「燈台へ」

ウィリアム・フォークナー「響きと怒り」「アプロサム！ アプロサム！」

リチャード・ブローディガン「西瓜糖の日々」

ピーター・ジェイ・ダダモ 「ダダモ博士のNEW血液型健康ダイエツ

ト」